

義経の里本別公園 散策図

義経伝説

7 弁慶洞

義経山の対岸にある諏訪山の中腹、岩をむきだした急斜面に弁慶洞があります。ポンペツを訪れた義経主従が見つ、弁慶ら12人がひと冬を過ごしたという伝説があるように、その中は広く間口約15m、奥行きは約16mもあります。



8 君待ち岩

弁慶洞への道の途中に、カンナでもかけたように平らで、たたみ一枚くらいもある大きな表面の岩があります。その名も「君待ち岩」。登山での疲れをいやす人々を待っているかのようです。



御所車石

羽衣橋を渡って本別川沿いに弁慶洞への道を進むと、登りにかかる手前で左手に大きな岩、御所車石が目につきます。従五位の検非違使・大夫尉となった義経が、愛する静御前を伴って京の町を巡っている姿をほうふつとさせます。



諏訪神社奥社

本別町の鬼門除けとして長野県人会が長野県の官幣大社諏訪神社の分霊を受けて頂上に建立されたものです。



1 北へ渡った義経の痕跡

源義経なくして、頼朝の平氏打倒は可能であったかともいわれるほど源平合戦における義経の功績は大きかった。その若き名将が居城において果てるわけがない。実は自刃したとされる一年前の一一八八年五月、三十歳の義経はわずかの従者とともに高館を背にして北へ旅立っていた。平泉北東の海拔五九六mの東稲山から山伏姿になって、北上高地を超えて遠野から奥羽地方をたどり、建久六年(一一九五)には三麻村の龍飛岬から蝦夷地の松前に渡ったとされる。その証拠に、東北地方には義経や弁慶にちなんだ地名が残されている。北海道に来た義経主従は、さらにサハリンから中国大陸へ渡ったとされ、それを裏づけるように道内各地に義経伝説とゆかりの地が残されている。松前の義経山に始まり江差の馬岩、寿都の弁慶岬、日高平取の義経神社、新冠町の判官館などがあり、平取の義経神社では、江戸時代に北海道を探検調査した近藤重蔵の寄進による義経像を神体として祀っている。さらにエリモ、広尾、大津から本別へとその足跡は続き、義経を文化神とした伝説が数多く伝えられている。

5 義経の館

本別公園一帯の「義経の里」の中心となる施設として、管理センターにもなっている「義経の館」には、源義経に関する豊富な資料が展示されています。



6 神居山展望台

展望台の場所は標高191m、展望台の高さは4mで、展望台西側には大きく蛇行する利別川、四段、五段と重なる利別川の段丘地帯から日高連邦まで望む眺めは素晴らしいです。



1 義経山・静山

本別市街地の南約2kmのところにある義経山は、海拔294m。低山ながら、白糠山地から流れ出す本別川が山麓部を侵食して、かつて海底にあった岩壁を洗い出し、奇岩怪岩からなる高山のおもむきがあります。



2 鎧巖

本別市街地から眺めると、ひときわ白く輝いて見える岩壁にすぎませんが、登山路から見る岩は、陽射しの角度でまぎれもなくカブトをきりりと着けた若武者に変身します。



3 源氏洞

源義経が自ら名付けたといわれる源氏洞。高さ4.5m、奥行き約6m、幅は約35mあります。義経主従が来るずっと以前、太古の昔には一帯が浅い海底にあって、時どきそれらの貝の化石が出土します。



4 百軒長屋

高さ2m、奥行き2~4m、延長75mにもおよぶくぼみは、まるでいくつもの小部屋を並べたようで「百軒長屋」と呼ばれています。義経がポンペツにやってきた時に、ここで雨霧をしのいだのではないのでしょうか。



2 ポンペツコタンと義経

龍飛岬から北海道へ渡った義経主従は、十年ほどのちに日高にたどりつき、ニイカップのオテナ(村長)の案内でエリモの山を越え十勝へやってきた。一行は義経と武蔵坊弁慶、亀井六郎、鷲尾三郎、片岡八郎、伊勢三郎、駿河次郎、三好道成ら屈強な従者が十二人。ピロウ(広尾)のオテナは「十勝を征服する気か!」と態度を硬化させたが、ニイカップのオテナの話で、英知にあふれた好意的なニシベ(貴人)と知り、山海の珍味をもって歓待した。数日後、ピロウオテナの案内で海岸をたどってピロフネ川、オйкаマナイトウを渡り、大津、トーブツ、トシベツトを経てオルベコタンに着いた。そして、約五里(二十km)ほど奥地のポンペツコタンにカムイヌプリ(神の山)があると聞いて、その山を訪ねることにした。時は秋。オテナの案内でポンペツに向かうと、山や沢にはブドウやコクワの芳醇な香りが満ち、取りきれないほどのキノコがあって、実りの豊かさに義経主従は驚いた。ポンペツのオテナは珍客を大喜びで迎え、「ヤイサマ」の歌や踊りも賑やかに歓迎の宴を開き、翌日、カムイヌプリに案内した。

- 1 義経試し切りの岩(稚内)
 - 2 義経洞窟(浜益)
 - 3 弁慶の刀掛岩(岩内)
 - 4 弁慶岬(寿都)
 - 5 弁慶の立岩(瀬棚)
 - 6 義経の馬岩(江差)
 - 7 義経山(松前)
 - 8 義経神社(平取)
 - 9 判官館(新冠)
 - 10 義経山・静山 義経山神社(本別)
 - 11 義経岩(屈斜路)
- 北海道に残る 義経、弁慶伝説





源 義経

みなもとのよしつね

～ 略歴 ～

京都鞍馬山の山中で
天狗とともに武術の修行をした牛若丸。
長じて巨人のような弁慶を打ち負かし
栄耀栄華を誇っていた
平家一門を打ち破った源義経。
ひよどり越え、八艘飛びなど
超人的な活躍で源氏の世を築きながら
兄・頼朝に追われて
非業の最後をとげた名将・義経。
人に知られる武将として
最も名高く親しまれている源義経は
易々と討たれたり
自ら死を選ぶわけがありません。

～ 伝説 ～

北へ逃れて蝦夷地・北海道に渡り
さらに大陸へ渡って
ジンギスカンになったともいわれます。
実在しながらその生涯は謎に包まれ
その人柄を偲ぶ伝説が生まれました。
北海道に渡った義経は
アイヌに狩猟や農耕、建築法など
暮らしに役立つ様々な事を教えて
サマイクル（文化神）となりました。
ポンベツ（本別）にも足を伸ばし
アイヌの人々に心から慕われて
数多くの伝説を残しました。

略年譜

平泉	潜伏期間	京都	平泉	鞍馬	京都
二八八 二八九	同年十月	同年十月	二七四	二六五	二五九
	二八七	二八五	二八四		同年二月
	(文治三年)二九歳 奉衡に義経追討の院宣 (文治五年)三一歳 義経、衣川館で自刃?	頼朝、義経追討のため 鎌倉を出発 (文治三年)二九歳 義経、奥州に赴く (二月十日の記録) 藤原秀衡没	義経、範頼平氏追討に 向かう一の谷合戦 (寿永四年)二七歳 屋島合戦	(永万年)七歳 このころ鞍馬に入る	(平治元年)一歳 京都に生まれる (父義朝 母常盤) 平治の乱

3 本別と義経伝説

カムイヌプリには昔から、「独り登るな。メノコ（女）は登るな。山に登ると雨が降る」という伝えがあった。

ツツジの根を分け、巨岩の間をよじ登って絶壁の山上に立つと、みごとな展望が開けた。遠く日高と大雪の山が連なり、十勝の大地と平野が足元から遙に広がっていた。目を奪う紅葉の間に阿寒の秀峰が噴煙をあげていた。と、そのうち天候が急変。黒雲が現れてたちまち雨となり、義経主従は「伝説どおりの神の山なり」ととても感動した。

一行はその夜、絶壁の洞窟で焚火をして泊まった。義経は岩山の変化に富んだ姿を讃え、「これより山は義経山、洞窟は源氏洞と申すべし」と名付けた。



さらにポンベツ川の対岸に、断崖絶壁が立ち並び、暗い大洞窟があるのを見つけて、翌日探検した。洞窟は思いのほか大きく、弁慶の提案で一行はそこで越冬することになった。ところが、オテナは義経のために新しい茅草の家を建て、一人娘（ピリカメノコ）を召使いとして、住むようにいつてきた。

娘は昼となく、夜となく義経によく仕え、いつしか互いに愛し合うようになった。そのころから義経が作ったアイヌ歌に「ピリカメノコトセナモクロ ニサタ パシコロ チシコラチ」（美しい女性といただき合い、翌朝カラスが鳴くまで眠る）という歌があると伝えられている。



春になり、義経は畑の作り方や家の建て方などをアイヌに教えては喜ばれたが、やがて又旅立つことになった。一行は別れを惜しんで住みなれた場所に弁慶洞、屏風岩などの名を付け、白い岸壁に絵や文字を彫り残した。彫り物はすでに磨滅して判じがたく、今では「古代文字岩」といわれている。

別れの朝、ピリカメノコは「一緒にお供させてください」と泣いて頼んだが、義経は笹竜胆の紋がついた家宝の短刀を授けて、心ひかれながら一年前に来た道に戻っていった。

義経に愛されたピリカメノコはその時、身ごもっていることを一人胸に秘めていたが、翌春男の子を生んだ。オテナは非常に喜び、「ヨシツネ」と名付けて育て、成人すると跡を継いでオテナとなった。父源義経の血をひいて人智、武勇にすぐれ、十勝はもとより石狩にまで名を馳せ、衆望を集めるオテナとなったといわれる。また、影のように付き添ってヨシツネの援助に努めたハポ（母）も、徳の高いメノコとして長く慕われた。以来アイヌは、義経をサマイクル（文化神）として伝説に残した。



義経伝説



義経の里本別公園

散策図

北海道本別町

発行 本別町観光協会 TEL 0156-22-2141

Designed by NPOあうるずびよこデザイン Printed by 本別印刷株式会社